

学生が雑誌をつくるということ

高原 智史

いま手に取っておられる（いまやりポトリで電子化され

ているため、手には取っておられずに、画面に目を向けておられるだけかもしれないが）この『比較文学・文化論集』は、学生の手による、「手による」という表現が曖昧ならば、学生が編集をしている雑誌である。東京大学比較文学比較文化研究室のホームページでも、「学生の活動」のコーナーで紹介が置かれている。昭和六十（一九八五）年に創刊された本誌は、三十五年を経て、元号を二つ跨ぎ、令和になって初めて、今年、三十七号を出すに至った。本稿の筆者は、今号の編集委員長であり、さらに、東京大学教養学部の前身である第一高等学校（二高）で出されていた『校友会雑誌』（明治二十三（一八九〇）年創刊）を題材に日本思想史を研究している身であって、編集委員長を引き受けた際、この機会に「学生が雑誌をつくるということ」につき、改めて考えてみたいと思い、本稿を執筆することにした。巻頭言代わりとし

てお付き合いいただければ幸いである。

学生が、というのはひとまず抜きにして、雑誌をつくるということには、どのような意味があるのだろうか。比較研究室でもメジャーな研究ジャンルの一つである雑誌研究であるが、筆者は自らを雑誌研究プロパーとは考えておらず、あくまで日本思想史研究の一環として雑誌に向き合っているのだが、そのような立場からすると、日本で「雑誌」が発行されるようになったのはいつからであり、その際、「雑誌」という言葉には、どのような意味合いが担わされていたのか、ということが気になってくる。ここで本格的な検討をすることはしないが、さしあたり『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）で「雑誌」を引いてみると、英語の magazine の訳であり、一八六七年発行の『西洋雑誌』一号の記事が引かれている。「語誌」の欄に、「雑誌」とは、学術団体が会員に配布する「新発明の説を泄さず集録し」た月刊誌であるという

のが、『西洋雑誌』の発行人であった柳河春三の言として記されている。「雑誌」という訳語自体も、柳河によるものであるとされている。そうだとすれば、「雑誌」というメディアのあり方は、当初から「学術」と深い結びつきを有したものと理解され、存在していたことになる。

「学術団体」が出てきたところで、「学生」という存在のあり方について考えてみたい。唐澤富太郎の『学生の歴史』¹は、「藩政末期の学生」から始めて「戦後の学生」にまで至り、最後に「新しい学生像樹立のために」という風に章立てをつくっている。「藩政末期」ということであれば、それはもう近代といつていいだろうが、唐澤はここで近代的な存在として学生を把握しようとしているわけである。（もちろん、前史を有し、その伝統を引き継ぐものとしてであるが。）日本における近代的な「学生」に込められてきた意味として大きくあるのは、彼らが「外国文化の担い手として、新しい国家の官僚として、インテリゲンチヤとして、資本主義社会の指導者として生長し、特権階級として尊敬され」²るような存在としてあるということである。このような学生像が妥当していたのは明治期頃までで、「大正期に入ると、日本の資本主義に行き詰りを生じ、ここに社会が二つの階級に分裂」³するに至ると、明治的な学生像は揺らぎ、学生は社会を指導するどころか、社会にとって危険因子となりかねない、「対

処」すべき存在となってくる。もう一つ、学生という存在に付された意味合いは、「大人」になる手前で修行中の身というもので、これは「青年」に通じる。以上の考察から明らかになるのは、学生は社会にとつての予備軍として存在するが、学生と社会との関係は時代に応じて変動してきたということである。それは、「学問」ないし「学術」と社会との関係の変動を反映しているともいえるだろう。

では、そのような「学生」が雑誌をつくるということにはどのような意味があるのだろうか。雑誌一般の特性を一つ挙げるとすれば、多くは発行主体が個人ではなくグループ単位であるということがあるだろう。人的に幅を持った存在として雑誌はあるということである。発行主体がグループであるということから、そこでは理念が必然的に求められることになる。どのような理念の下にグループを形成するかという点で、どのような理念の下に雑誌を構成するかということにつながってくる。この『比較文学・文化論集』⁴について言えば、「東京大学比較文学・文化研究会」が発行主体となっている。実態としては、比較研究室の院生が編集委員会をその都度組織し、本誌の編集、発行を担うというものになっている。本誌の「理念」については、研究室のホームページに『比較文学・文化論集』が目指すのは、既成の学問の枠組みや体制にとらわれない、独創的な研究成果を学生が発表し、互いに

刺激を与え合う場として機能すること」とある。前半にある、この雑誌に載せられる内容の目指されるべきありようについては、比較研究室において目指されている学問の仕方にあるまま接続するだろう。比較研究室の枠で編集委員会が組織されていることからそれは頷けるだろう。後半にある「場」としての機能については、筆者が研究している明治の「高」でも、雑誌を発行する目的は、「其とき言とをもとり集め、月ごとにすり巻とし、広く世に顕はして、後進の学生をはけまし、かつ校舎の勉を明かにせんとす」とされており、重なるところがある。「広く世に顕はして」という面については、本誌の記事の多くが東京大学が設ける「Tokyo Repository」にて、いまや全世界に向けて公開されるに至っている。「互いに刺激を与え合う」という点については、ただ雑誌をつくるということだけでなく、それが読まれ、そうしてさらに、次の号、次の号が順次つくられていくということまで考えなくてはならない。ここで、先に挙げた『日本国語大辞典』の「雑誌」の説明を思い起こしていただきたい。そこには、「学術団体が会員に配布する」とあった。つまり、発行する側と読む側とがある程度重なっていて、全く分離しているわけではないということである。一高『校友会雑誌』では、文芸部委員の数人の学生が編集を担っていたが、多くの学生が雑誌を読んで寄宿舍において校友の記事について議論を交わし

たことだろう。そこからさらに、自ら論稿を書いて投稿をする学生もいたはずである。また、創刊当初から「批評」という欄が設けられ、前号に載った記事に対して批評がなされた。ときには、元の記事の著者がその先の号で、批評に対する批評をさらにすることがあり、そこから誌上で論争が展開されることもあった。いずれにせよ、雑誌というものは、一つの号を一度つくったらそれで終わりというものではない。出されたものを読む人がいて、読んだ側で思索や議論がなされ、読み手がまた作り手ともなり、作る側にフィードバックがなされた上で、次の号がつくられ、そのまた次の号がつくられていく、というようなサイクルとしてあるべきものである。ここで、読んだ側と作る側に人的に重なりがあることが、このサイクルが十全に回っていくために必要な保障となる。そうした雑誌というメディアは、「学術」のために必須の「制度」であるといってもよい。そうしてそこでは、人的なつながり、コミュニティがいかに形成されているかということが決定的に重要になる。人が学問をつくるのだ。

人的コミュニティのありようが決定的に重要であるとして、「大人」の学者ではなく、「学生」であるという場合に何か特性があるだろうか。学生がつくるコミュニティの特徴とはなにか。一つ考えられるのはカネとヒマだろう。「学生」にはヒマはあるがカネはないというのは今も昔も変わらな

い、と言いたいところだが、近年では「学生」も随分と忙しくさせられてきているし、「大人」の方もカネがあるとは言えなくなってきたようにある。また、「学生」というのが「大人」に対する語であるというのも近年では怪しくなってきた。社会人学生も増えたとし、職業生活をリタイアしてから再度大学へというケースも出てきている。国籍や性別の観点から「学生」の多様性は増してきている。このようなか中で、どこから考え始めるにしても、「学生」とはなにか、「雑誌」とはなにか、そうして「学問」とはなにかがそれぞれ有機的に連関して全体を形成しているものとして、総体的に考え直されるべき時期にきているということだろう。

学問をめぐる制度、環境が激変してきていることはいまさら言うまでもないだろう。雑誌についても、(本稿冒頭で示唆したように)紙媒体から電子媒体へ、流通手段についても、郵便から電子送信へと変わってきている。しかし、どんなに物的な環境が変わろうとも、学問を支え、生み出すのが、具体的な人とそのコミュニティであることはいつまでも変わらない。雑誌というメディアを通じて人々が結びつくということの本質がいつまでも変わらず、そうして、この『比較文学・文化論集』という雑誌が、学問をよりよい方向へと導いていくための様々な意味での「器」となることを願って、本稿を閉じることにした。

注

1 唐澤富太郎『学生の歴史』（創文社、一九五五年）

2 同前、一―二頁

3 同前、二三頁

4 小中村清矩『祝詞』（第一高等中学校校友会『校友会雑誌』一号、

一八九〇年、一頁）